

2021/8/8

(うと Q 世話し 極めて正しい英語じゃないと困るの?)

「正しい英語」

是を我が国において常日頃「必要として」いるのは誰でしょう？

直ぐに思いつくのは外交官や外務省のお役人さん。或いは企業の輸出入担当者さん。

それでは同じく我が国において常日頃から正しい英語を「要求している」のは誰でしょう？

こうなってくると直ぐには答えが出てきません。

それでも考えを進めてみると、お役所や企業の上司さん、そしてその方々に「正しい英語」を促してきたお役所、即ち「教育担当省」でしょうか。

そして更に正しい英語でないと「困る」人達は誰か？

これは意外と簡単で英語学習産業の方々や英語教育機関の方々でしょう。

平たく言えば英語塾、英語学校の先生、と言うより「その経営者さん」と高等教育機関の「教授や講師さん」等でしょうか。

此処で質問の向きを変えてみます。

では「英語を話せるようになりたい」と思っている人は誰でしょう？

恐らく老若男女を問わず相当数の方々がそう思っていたり想っていた事があったりしたのではないのでしょうか。

こうやって見てみると何かがアンマッチな事に気づきませんか？

そう

「正しい」

の有り無し。

要するにこの一点で要求側と提供側にアンマッチが生じているのです。

要求側は「正しいか正しくないか」より「ペラペラ話したい (話せる様になりたい)」であるのに対して提供側は「正しくないと海外で通用しないぞ」と突き返して来ます。

しかし実際は「国の数だけ英語はある」と申し上げたのが実態です。

それでは彼らは何故そう言うのか？

「極めて正しい英語」でないと商売にならないからです。

例えば受験や TOEFL, TOEIC。

この時、提供側はまず落とす事を目的にトリッキーな引っかけ問題や外国では気にもとめない間違い探し問題を作り、次の過程ではその難易度が上がれば上がる程それをクリアするノウハウを高値で売れる云々。

つまりこの方々にとって英語は「極めて正しく」ないと「困る」訳です。

そして更に悪いのはお役所や企業の上司さん達が「このシステムに順応し且つ掻い潜れる様になってしまった」思考脳の持ち主である事です。

総本山である「教育担当省」も含め完全な一枚岩なのです。

これでは要求側の願いが入る余地等あろう筈ありません。

分厚いステーキを食べたいと言っているのに出てくるのはお上品な会席料理ばかり。

しかも逐一食事作法は寸分変わらず守りなさいと言う耳タコ注射付で。

「どうなってんの？」

と言いたくもなるのですが周りは何も言っていないので

「空気読んでないのは自分だけかも」

と「非」を自らに負わせて黙ってしまいます。

余談ですが、英語「も」話す外国の貧しい国々では子供に英語を教えるのは学校ではなく生活の中で周りの大人達が自然発生的に教えている様です。

そこで最後にご提案。

「だったら主要三科目や受験科目から英語を外しちゃえば？

その方が余程みんな喋れる様になる気がするんだけど。

どうかな？」